令和３年度　公立鳥取環境大学

学校推薦型選抜（Ⅱ型）問題

小　論　文

（環境学部　９０分）

（注意事項）

１．解答開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
２．問題冊子は５ページ、解答用紙は２枚です。
３．解答用紙の所定欄に受験番号、氏名を記入しなさい。
４．解答用紙は横書きです。
５．試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰りなさい。

問題

以下の文章は、内山節『共同体の基礎理論－自然と人間の基層から』（２０１０年）の一部を抜粋・改変したものである。これを読んで後の問に答えなさい。

明治以降の日本は欧米に追い付き、追い越すことをつねに目標においてきた。この「目標」は戦後においても変わることはなかった。明治になると日本は欧米から技術、政治システム、文化などを輸入しはじめる。もっとも、政治、社会システムの領域では「日本的」ということが強調されもしたが、全体としては近代化の方向が模索されたことに変わりはない。

とすると近代化とは何であったのだろうか。それは多岐にわたる変化の集合である。第一に国民国家の形成があった。国民国家とはそれまでの地域の連合体としての国家を否定し、人々を国民という個人に変え、この個人を国家システムのもとに統合管理する国家システムのことである。第二に市民社会の形成がある。個人を基礎とする社会の創造である。第三に資本主義的な市場経済の形成があった。さらにこれらの動きを促進するためには、科学的であることや合理的であることに依存する精神を確立する必要があったし、歴史は進歩しつづけているのだという「共同幻想」を定着させる必要もあった。

明治維新以降の時代とは、このような壮大な変革に向けて日本が舵を切った時代でもあった。

この変革にとって大きな壁になっていたのは、日本における共同体の存在である。日本の共同体は自然と人間の共同体として、生の世界と死の世界を統合した共同体として、さらに自然信仰、神仏信仰と一体化された共同体として形成されていた。ここには進歩よりも永遠の循環を大事にする精神があり、合理的な理解よりも非合理的な諒解に納得する精神があった。人々は共同体とともに生きる個人であり、共同体にこそ自分たちの生きる「小宇宙」があると感じていた。

それは間違いなく、近代化の前にそびえる壁だったのである。たとえ廃藩置県をおこない、国家システムを整備したとしても、そもそも人々に国民意識をもたせること自体が、つまり自分は日本人だと意識させること自体が、容易ではなかった。実際には国民意識は日清、日露のふたつの戦争をへてその確立に成功していくが、日本から共同体をほぼ一掃するのは戦後の高度成長の終焉まで待たなければならなかったといってもよい。

日本における共同体はそれほど根強い問題だったのである。

だから日本では、共同体はつねに近代化との関係で論じられていた。・・・(略)

１９５６年からおよそ２０年間つづく高度成長期は日本の社会を大きく変えた。もちろん１９７０年代中期以降も日本では経済成長がつづくから、高度成長がいつ終わったのかは議論のあるところではあるが、とりわけ１９６０年代の社会変化はすさまじかった。人々の所得は大きく増加し、日本に巨大な消費市場が生まれた。農村から都市への人口移動が加速し、農山村の過疎化と大都市の形成が一気に進む。進学率も高まり核家族化も進行していった。大都市周辺にはニュータウンが生まれ、マンションという居住形態も一般化しはじめた。

こうして１９６０年代後半に入ると「近代化された日本社会」のかたちがみえるようになったのである。さらに高度成長の中で日本の企業は終身雇用制、年功序列型賃金、企業内福祉制度などを確立していたから、高学歴化、安定的雇用、核家族的な家族形態、多消費型生活というライフスタイルが、「近代化された日本社会」の都市型人間のあり方として定着していった。

それは人々の精神にも変化を与えはじめる。「近代化」はそれが目標であった間は、その「プラス」の側面ばかりが視野に入る。それが本当に「プラス」であるのか「幻想」であるのかはともかくとして、思い描かれた近代化の価値が強く意識される。共同体の「束縛」から自由になれば、人々は個性豊かで生き生きとした個人になっていくだろうと多くの人たちは思っていた。経済の発展が豊かな生活をもたらすと誰もが考えた。それがまだ目標である間は、近代化はある種の熱狂を伴って語られていたのである。

ところがそれが現実になってくると、人々のなかにある種の戸惑いもでてくる。ちょうど西ヨーロッパ社会で１９世紀に近代社会のかたちがみえはじめたとき、「我々がめざしたのはこんな社会だったのか」という挫折感を抱く人々が生まれ、そこから近代批判派としてのロマン主義の流れが形成されていったように、近代化が目標から現実に変わってくると、その負の部分もみえはじめたのである。

同じことが、１９６０年代後半の日本でもおこった。近代化の負の部分がみえはじめたのである。農山村では過疎化や経済の疲弊が進行していた。都市公害や工場公害が広がり、環境は確実に悪化していた。ダムや堰堤は川を破壊し、海岸では埋め立てによる自然の喪失が進んだ。乱開発による自然破壊も全国に広がっていった。

さらに「安定的な市民生活」を手に入れたはずの都市の人々のなかにも、新たな戸惑いが生まれていた。安定化とともに失ったものがあるのではないかという、ある種の喪失感が芽生えはじめたのである。・・・(略)

当時の若者たちのなかに、それでいいのかという思いが生まれていた。可もなく不可もなく展開してくだろう人生。企業に所属し消費者として暮らす個人。システムに飲み込まれていく一生。

この状況を変えたいという思いが、１９６７年以降の学生運動を領導していくのである。

高度成長によって日本の近代化のかたちがみえてきたとき、環境の悪化や農山村の疲弊ばかりでなく、この社会で暮らす人間の充実感のなさも感じられはじめていた。近代化された社会における「存在の空洞化」とでもいうべきものが意識されはじめたのである。その感覚が疎外論の「流行」を生み、近代社会とは何かを問い直す必要性を人々に与えていた。・・・(略)

共同体とは何かという問いは歴史的、あるいは時代的文脈のなかで語るべき課題だと私は思っている。なぜなら過去とは時代的な問題意識をとおしてみえてくるものだからである。だから１９７０年代に入って「自然保護」という課題が意識されるようになったとき、それは共同体への関心にも大きな影響を与えることになった。

日本で広く環境問題が意識されるようになったのは、１９５０年代の終わり頃にさかのぼる。熊本のチッソ水俣工場から出た有機水銀混じりの廃液が、いわゆる水俣病を引き起こしたのである。そして１９６０年代に入ると、都市公害問題が広がっていった。実際、６０年代の都市公害問題は深刻で、光化学スモッグは東京など大都市の人々を悩ませていたし、死の川、死の海が各地に生まれていた。ただしこの時代の問題意識は１９７０年代以降の環境問題とはとらえ方が大きく異なっている。６０年代までの理解のされ方は、それらはあくまで公害問題であり、悪い企業や適切な手を打とうとしない政府や行政の問題としてつかみとられていた。悪い企業が公害をまき散らしている、悪い政府や行政が都市公害を野放しにしているという認識であり、逆から述べれば政府や行政が企業への指導も含めて適切な手を打てば公害問題は解決するととらえられていたのである。

１９７０年代以降の環境問題のとらえ方はそれとは違っている。私たちの文明的生活自体が環境悪化の原因として理解されるようになった。我々は環境悪化の被害者であるとともに加害者でもあるという認識が広がりはじめたのである。自分たちのあり方を問うという視点が、こうして定着していった。

ただし、７０年代の日本の環境理論は、それがアメリカ型環境理論に大きく影響されていたこともあって、「人間のための自然・環境保護」の理論だったことは記憶しておかなければならないだろう。人間の生活の持続に黄信号がともっている、だから人間の暮らしを守るためには自然・環境を守らなければいけないという人間中心主義的な環境理論が支配的だったのである。ところがこの論法でいくと困った問題に直面する。というのはこの論法では、人間のための開発の必要性の主張と同じ土俵に上がってしまうために、自然保護か開発かをめぐる、同じ基盤に立った論争がおこってしまうからである。どちらも「人間のために」、なのである。

ここからアメリカ型の自然保護論は「自然権」理論へと向かう。自然自身が、人間のためになるかならないかにかかわらず、生存権をもっているという理論である。しかしこの論法にも無理がある。なぜならすべての自然の生命体に自然権があるとするなら、そしてこの権利は侵してはならないのだとするなら、人間の活動自体が否定されかねないからである。例えば農地を拓くこともある種の生命体に悪影響を与えることになるだろう。原生的自然がなければ生きていきにくい生物も存在するからである。ウイルス性疾患にかかったときそのウイルスを殺す薬を投与することはどうなるのか。ウイルスにも生存権があるとするなら、それだけを特例として認める根拠はないということになる。しかもこの特例を認めてしまえば、「人間のための」自然保護と同じことになってしまうのである。

自然を保護するとはどのような思想にもとづいてなのか。この問いは簡単ではないのである。その結果多くの人々は「自然保護」から「持続可能な社会」へと問い自体を変更させていった。私たちの世界は持続可能性を失いつつある、という認識を基盤にして、持続可能な世界を再生するための方法を考えようとしたのである。この変更は環境問題を解決するために必要な課題を拡大した。私たちの生活はどうあるべきなのか。資本主義的市場経済をどうとらえるのか。世界の貧困問題が社会の持続性を失わせているという課題もある。独裁や人権、女性差別などが持続可能な社会の阻害要因になってはいないか。

こうして多くの人々は、持続可能な世界とは持続可能な秩序のなかに展開する世界のことだと理解するようになった。とするとこの秩序とは何か。それが生活のあり方から人権、貧困問題までを含む「体系」としてとらえられた。・・・(略)

だがこうなればまた新しい問題がでてくる。そもそも世界をある秩序下におこうとすること自体が、かつては植民地やそれぞれの地域の破壊、文化の解体を生み、「帝国主義的世界支配」をつくりだしてしまったのではなかったか。それが極端なかたちで展開したのがファシズムだったが、世界を持続可能な秩序下におこうという発想自体にひそむ問題は存在しないのか。さらに持続可能とは何のことなのか。人間の文明の持続可能性なのか。自然の持続可能性なのか。・・・(略)

このようなさまざまな問題がひそんでいるからこそ、環境問題では先進国と途上国、新興国の対立がたえずでてくる。先進国の文明を持続させるための世界秩序であってはならないという批判が途上国、新興国からはでてくるし、先進国間でも温存したい文明をめぐる対立が発生してしまう。

今日では自然保護の思想も、「持続可能な社会」論として展開してきた理論も、どちらもが壁に突

き当たっている。

この思いは日本では静かに広がっていたように感じる。だから自然保護や環境問題に対する意識が広がってくると、自然と人間の関係を問いなおそうとする思想が生まれてきた。自然をどうするかの前に、環境をどうするかの前に、近代以降の自然と人間の関係のゆがみを問いなおそうという発想である。・・・(略)・・・実践的な活動のなかではこの傾向は日本ではいっそう強かった。里山と人間の関係をとらえ直すところからはじまった里山整備の活動はすでに全国で展開されているし、土と人間の関係を問いなおした有機農業の広がりも、今日では広く定着している。

このような展開が日本では共同体の再評価をも提起していくことになる。自然と人間の関係を問い直すこと、近代以降のこの関係のゆがみをいかに直したらよいのか、このような問題意識をもつとき、自然と人間の関係をかつて支えていた共同体の役割が視野に入らざるをえなかった。

社会が近代化をめざし、人々が個人を基調にしてできた市民社会に未来の可能性を感じているときは、共同体は解体すべき対象であった。この時代には共同体は封建的なもの、個人の自由を奪うものとみえた。しかし個人の社会の問題点が意識され、現代における人間の存在に迷いが生じてくると、さらに自然と人間の関係を問いなおそうという問題意識が芽生えてくると、共同体をとらえる「まなざし」も変わってくる。現在の共同体論はここから生まれた。

だから今日の共同体への関心は、過去への思いとしてではなく、未来への探求として展開していくことになった。自然と人間が結びなおし、人間と人間が結びなおしていく。そういう社会のあり方を共同体としてつかみ直す意識が、広く展開するようになったのである。

問１．筆者は、近代化とは多岐にわたる変化の集合であるとして、その変化の内容を具体的に５つ示している。その５つを各 20 字以内で示しなさい。

問２．近代化にとって共同体が障害になった理由は何か。上の問１で示した近代化を構成する変化（要素）の中から一つの要素に着目して、その変化を共同体がどのように妨げるのか、あなた（自分）の言葉を使って１２０字以内で示しなさい。

問３．１９６０年代以降の日本でみられた近代化の負の側面を端的に言い表すとどう表現できるか、文章中に出現する言葉にこだわらず、あなた（自分）の言葉を使って３０字以内で示しなさい。

問４．筆者は１９７０年頃を境に環境問題のとらえ方が変化したとしているが、どう変化したか、１００字以内で示しなさい。

問５．「持続可能な社会」論のプラス面とマイナス面について、あなた（自分）の言葉で、それぞれ８０字以内でまとめなさい。

問６．今後、自然と人間が結び直していくことが、新しいかたちの共同体（社会関係）を基礎として可能となるとするなら、それはどのような共同体の下で可能となると考えられるか。あなた（自分）が考える新しい共同体のあるべき姿を、想定される共同体の具体例を示しながら４００字以内で述べなさい。